

第1回 新潟市都市計画マスタープラン策定検討委員会 主な意見概要

日 時： 令和2年8月11日（火） 午後3時～5時

場 所： 古町ルフル4階 401会議室

出席者： 新潟市都市計画マスタープラン策定検討委員会

小池由佳委員、佐藤由香子委員、佐野可寸志委員、鈴木孝男委員、

田村圭子委員、富山栄子委員、樋口秀委員、柳沢厚委員

オブザーバー

大花博重（新潟県土木部都市局都市政策課長）

事務局

柳田芳広部長、松島秀樹課長、佐藤功一課長補佐、淡路千尋主幹、

阿部貴行主幹、江口泰弘副主査

■今後の都市づくりの方向性の検討について（※主なご意見を抜粋）

（1）人口減少下での住み方について

- ・「移住・定住も含めた農村集落の維持活性化」について、移住するための条件を整えるだけでなく、住み続けたいと思う状況をどう確保していくかというのが大事。
- ・子どもや高齢者がどこに暮らして、どのような移動手段を利用するのかなど、令和22年の推計人口である72万人が新潟市の中でどのように暮らしていくのかを考える必要がある。
- ・空き家対策について、戸建て賃貸のニーズが高い。市営住宅（戸建て版）のような方向で考えていければ埋まっていくのではないかな。
- ・人口減少下において、市街化区域を増やして新たな住宅の建築を郊外へ誘導していくことは、これからの20年も引き続き行っていくべきかどうかの瀬戸際にあると思う。
- ・子どもが少ない地域での環境をいかに維持していくのかというところが大きな課題になっていくのではないかな。
- ・高齢者や障がい者など何らかのサポートが必要な人達が、その地域の中でいかに生活を維持していくかということも非常に大事で、お互いに支えあえるコミュニティをまちの中に一定程度残していくことが必要。

（2）地域ごとの検討・地域間連携について

- ・公共交通については、中心部と郊外部に分けて詳細をみるとよいのではないかな。
- ・拠点と郊外部の結びつきを産業でも強調するとよいのではないかな。
- ・新潟市に残っている市（イチ）は、農家と消費者の接点の場、地域の交流の場となっており、このような文化は魅力がある。高齢化や担い手減少の課題もあるが、新しい担い手も入れて、日常的に農村との交流ができると良いと思う。

(3) 今後の検討の進め方について

- ・分野毎でのアプローチも必要だが、主要な課題に対して各項目に何が求められるかを考えていく方がよいのではないか。
- ・重要な柱をいくつか立てて、それぞれの政策を考えるとよいのではないか。
- ・どうしても都心部の方に話が行きがちだが、郊外部の空間と環境を維持するということを考え、今の状態と放置するとどのようになるかなども検証していく必要がある。
- ・都市と近い農村集落のあり方を検討していく上で、新潟はモデルを追求しても面白いと思う。
- ・保育サービスを充実させてきた一方で、人口減少により子供の数が減っていく中、今後は保育サービスを整理していかなければならない。その時に、まちづくりと保育サービスをどう繋げていくかの検討が必要。
- ・新潟市から視点を広げ、アジアを意識しつつ太平洋側とも連携するように、全国を意識したものがあってもよいのではないか。

(4) その他

- ・10年前から今までの10年間とこれからの10年間とは、時代の流れは大きく異なる。
- ・新潟の強み(ICや空港等のアクセスでの優位性)が前面に押し出されていない印象を受ける。
- ・新潟市はすごく住みやすく、開かれたまちというイメージがあるが、あまり伝わっていない。
- ・公共交通については、マイカーはよくないと切り捨てるのではなく、郊外などでのマイカーの使い方も考慮した方がよい。
- ・オランダのアムステルダムは、新潟市の都市構造に似ていると言われているが、農業に力を入れていることや土地が平らで自転車で移動しやすいことから、「食」「農」「健康」のライフスタイルが定着しており、このような健康的で豊かに暮らせるライフスタイルを新潟市も目指すと良いのではないか。
- ・新潟市は「泣く泣く来て、泣く泣く帰る」とよく言われている。(旦那の転勤に付いていった時は曇天で友達もない新潟に泣く泣く来たが、帰りは新潟の人情と美味しい食材によっていつの間にか新潟人になったところで、また転勤に付いていくことになり、泣く泣く帰る)

■「目指す都市の姿」のキーワード

- ・政令市でありながら「田園」をキーワードに入れていてインパクトがある。
- ・「環境」や「景観」といったキーワードが少ない。
- ・「結節点」「拠点」が日本海側の政令市としてのキーワードになるのではないか。
- ・その他キーワード
「レジリエンス(強くしなやかなまち)」「世界に開かれた(明治の開港5港)」、「食」、「農」、「健幸」、「多様性(外の人や文化を受け入れられる地盤があるため)」、「子育て世代が住みやすいコンパクトなまちづくり」、「思いやり」、「共生」、「環境に優しい(自転車に向いている環境)」